ひと物語 vol.100

「12分の1の世界」を精巧に再現

ミニチュア作家　ヒナぞーさん（57歳）

指先にのるバイオリンやタイプライター。アンティークなピアノやオルガンのミニチュア作品も細部まで作り込まれ、「完成させたときの達成感は何とも言えません」とその魅力を語ります。

◇

朝は市内の修復工房「アトリエピアノピア」に誰よりも早く出勤。



修復工房をイメージして作られたドールハウスと

ピアノ修復師として、日中は19世紀から20世紀の初めに製造された本物の楽器と向き合い、夜はミニチュア作家として自宅で極小の世界に夢を膨らませます。「職人と作家のどちらも根気のいる作業ですが、すごく楽しい」と笑顔を見せます。

「こんな世界があるんや！」

壊れたカメラを分解したり直したりすることが大好きだった少年が実物の12分の1サイズのミニチュア作品と出会ったのは、大型車両の整備士をしていた35歳の頃でした。たまたまテレビで見て「こんな世界があるんや！」とびっくり。しばらくして大阪市内の展示会でパンやケーキのミニチュア作品を実際に目にし「小さいけれど存在感があり衝撃を受けました」。

すぐに材料の樹脂粘土を買ってパンを作りましたが、なかなかうまく出来ません。本物の色合いを出すために絵の具を混ぜる分量などで苦心し、歯ブラシの細い毛先などを使って質感を生み出す工夫を重ねました。

器用な手先は〝神の手〟

転機は、建物や部屋の中に家具や小物を並べるドールハウスに挑戦していた39歳の時に訪れました。ピアノのミニチュアを作ろうと修復工房を訪ね、「ピアノの中を見せて欲しい」と頼み込みました。

大きなピアノの部品は8千点～1万点。想像以上に精密な内部の構造に驚き、仕事を手伝いながら独学で学びました。3か月が過ぎる頃には複雑な仕組みも理解し、古い足踏みオルガンも修復。雇うつもりはなかったという社長も「修復にマニュアルはありませんが、器用な手先はまさに〝神の手〟」とその技術に感心しました。

寸法や構造を把握して再現

モットーは、よりリアルなミニチュアを作るために実物をよく観察すること。工房をイメージしたドールハウスに並ぶ6台のピアノとオルガンは、自ら修復した実物の寸法や構造を把握して完成させました。ピアノの廃材も寄せ木にして利用。ワイヤーに銅線を巻いた弦も12分の1サイズで再現しました。

「一番難しかった」という全長5㎝のバイオリンの作品は圧巻です。中が空洞のボディは本物と同じ構造で作り、ネックの部分は黒い鍵盤を使いました。ミニチュア専用の工作機械も自作。ドールハウスの看板の文字はパソコンと組み合わせたレーザーカッターで1㎜の狂いもなく切り出しました。



指先にのるバイオリンのミニチュア

「新作にどんどん挑みたい」

職場の工房はミニチュアのアイデアが満載です。最近はSNSでも紹介し、作品を見て修復を依頼してくる顧客もいます。来春の展示会に出展する新作の題材も工房に持ち込まれた19世紀のトイピアノ。「新しい作品にどんどんチャレンジし、皆さんに小さな世界をいろいろな角度から見て楽しんでほしい」と話します。